

Eureka XII

六年制通信 No.4 令和6年4月26日(金)号

勉強の仕方

まず勉強の前提として、最近特に軽視されているような気がして心配なことを言っておきます。それは、SNSの発達のせいなのでしょうが、何でも手軽に検索できるようになったので、そこには間違った情報が多々あるにもかかわらず、検索さえできれば覚える必要がないという風潮があるように思います。スマホなどで検索する技術さえあればいいと、そういうことをはっきり言う、いわゆる評論家という人たちもいます。昔電卓が出始めたころ、これさえあれば九九を覚える必要がないなどと言われたことがありますが、同じ理屈なのでしょう。しかし暗唱、暗記を軽視しては絶対にいけません。検索できるということと、いつでも取り出せる知識が頭の中に入っているということは根本的に違います。検索は、例えば美味しいお店を見つけるのにはいいかもしれませんが、私たちの精神を鍛えるといった側面には全く役に立ちません。しかし古今東西の物語、名文、詩歌、諺、箴言の多くをいつでも取り出せる人は、生きていく上で頼りとなる言葉を数多く持っているという点で、その精神は強く逞しく成長するでしょう。以前紹介したように「人は生きるのに食べ物よりも物語が必要な時がある」のです。暗唱、暗記を軽視しないでむしろしっかり取り組む、これが大前提です。その上で、君たちにとっての勉強とは何かを考えましょう。

君たちの勉強というのは、正確には君たちの、この時期特有のことです。君たちの場合、目の前に大学の入学試験があります。ほとんどの人がこれに挑むことになるでしょう。挑むだけではなく合格しなければいけません。君たちと私の違いはここですね。私はおそらく今後、自分が特に望まなければいかなる試験も受けることはないでしょう。仮に受けて、落ちたとしてもどうということはないし。ですから私は自分の好きな勉強を自分で決めた到達目標に向かって勉強ができます。羨ましいでしょ。

君たちの勉強は、はっきり目標が決まっています。身も蓋もない言い方ですが、試験に合格すること、そのための勉強です。避けることはできません。では、試験に合格する勉強とはどのようなもののでしょうか。ここでよく間違える人がいるようです。厄介なことに、勉強している気になるやり方があるからです。それは、教科書を読んで覚える、参考書で教科書の知識の肉づけをする、です。社会科の勉強で有りがちな気がしますが、先ず知識をためようとします。それが悪いわけではありません。しかし、これ、何時間も本を読んで知識が増えていくので、いかにも勉強している気になって、そこで満足してしまう人がいるのです。これが危険なのです。つまり、インプットで終わってしまう人ね。インプットは大切ですが、そこで満足してはいけませ

ん。入試を受けるというのは、入試問題を解くというのは当たり前ですがアウトプットの世界だからです。知識を得るということと問題を解くということは、インプットとアウトプットの関係です。知識があれば問題が解けると思ったら大間違いです。それは例えば、谷崎潤一郎や三島由紀夫の『文章読本』を読んだら小説が書けると思っ
ているようなものです。文章の書き方の本をいくら読んでも文章が書けるようにはなりません。文章が書けるようになる方法はただ一つ、文章を書くことです。何度も何度も。そもそも知識の定着はアウトプットなしにはありえないと知るべきです。

従って、『文章読本』を読んで終わりにしないで実際に文章を書き始めるのと同じように、教科書を読んで問題集に取り組まないといけません。ここでも気をつけることがあります。できない問題が含まれている問題集を選ぶことです。やさしい基礎編ばかりを解いてはいけません。問題集は「失敗から学ぶ」ために解くのです。いきなり全問解けたなら、問題集を選びそこなただけです。とにかく難しくても問題にトライします。わからなかったら、その問題を放っておいて先に進んではいけません。まず解答を読んで理解できるかどうかチェックし、理解できなかつたら参考書に戻って理解できるまで勉強します。ここが大切。できない問題を無視しない。理解できたら類題を解いてみる。学力は間違った問題の復習を通して身につくのです。

さらに極めつけの「アウトプットによる知識の定着術」は、誰かに教えてみることです。ですから先生方が問題を解けても当然ですよ、毎日やっているのですから。

今週のおすすめ

・夏川草介 『スピノザの診察室』 (水鈴社)

夏川さんもお医者さんです。私はまだ読んでいませんが、『神様のカルテ』の著者なのですね。夏川さんはスピノザを本当に読んでいるようです。そんなお医者さん、いるんですね。大学病院で将来を嘱望されていた内視鏡手術の天才雄町哲郎はシングルマザーだった妹の死をきっかけに、残された甥と生活するため大学を辞め、町の病院に勤務します。先輩医師との変わらぬ信頼関係がいいですね。この本、いろいろと考えさせられました。何人もの患者を看取りながら、主人公は考え続けます。

物語の終わるころ、雄町がゆっくりと話す言葉は「医療」を「文明」や「教育」あるいは他のものに置き換えても通じるように思いました。彼は言います。「…医療がどれほど進歩しても、人間が強くなるわけじゃない。技術には人の哀しみを克服する力はない。勇気や安心を、薬局で処方できるようになるわけでもない。そんなものを夢見ている間に、手元にあったはずの幸せはあっというまに世界に吞まれて消えていってしまう。…」、「人は無力な存在だから。互いに手を取り合わない、たちまち無慈悲な世界に吞み込まれてしまう。…」、こう言う雄町哲郎に周りの医者や患者や看護師は信頼を寄せていく。読んでよかったと思える本です。

ちなみに舞台が京都なので、学生時代に知った馴染みのある地名がいっぱい出てきて私には具体的な光景が目には浮かび、知らない人よりは楽しめたかも。

BGMは The Tokens の *The Lion Sleeps Tonight* でした…。